

どうして私は生まれてきたの（上）

2003年2月8日 岡本 英夫 先生

一 生まれてきた者の最大の問題

病院が建てられて十年ということですね。二階のこの部屋が、私達が仏法の教えを聞いていくのに大変大きな役割を果たしてこられ、私自身も随分と御世話になりました。もう何年になりますか。九年くらいかもしれませぬね。

さて、土曜日のこの午後の時間は、公開講演会ということで、その都度テーマを設けてお話をさせて頂いているんですが、今日は「私はどうして生まれてきたの」ということにしました。この言葉は、おそらく私達すべての者にとって自分の口から出なかったことはないと思いますね。小さな頃からずっと言い続けてきているような言葉のようにも思います。

誰でも口から出るような言葉なんですけれども、同時に本当にこの問題が解決しなければ、それこそ何の為に生まれてきたのか、生きる意味が分からないままに終わってしまうということになるでしょう。

私達は誰しも、生まれる前はいなかったわけですね。無から有が生じたようなもので、考えようによっては、敢えて此の世に生まれてきた、無から、敢えて有になったようなものですね。

この世に生まれ、この人生を生きてゆくということに、どのような、またどのくらいの意味があるのか。一体人生とは何なのか、生まれてきた以上、ハッキリ知りたい、私達の最大の問題と言えるでしょうし、勿論、私達の先輩もちろんと言うか、人類始まって以来の皆が考え続けてきた問題でしょう。

お釈迦様に発した仏教の教えによって生きていこうとする人達も、勿論この問題をずっと考え抜いていかれたわけです。お釈迦様が説かれた教えそのものも、その後の無数の人達が尋ねて行って明らかにされたかかれた教えも、それらを今日私達が仏教の教えとして聞いているのですが、それらの教えのテーマは何かと言えば、私という人間がこの世に生まれて生きる意味は何かという、この問題の解決、これが中心テーマだとも言えるのではないかと思います。

二 真実に^あ遇えない存在

そこで、その沢山の教えの片鱗^{へんりん}と言いますか、ほんの僅^{わず}かな側面ですけれど、少し見ていってみたいと思います。先ず初めに私達の課題ですね、問題点です。それは様々に言われると思いますが、今は結論としてですね、人間の課題、問題点というのは、「真実に遇えない者」、それが人間なんだと、このように言ってはどうかと思います。まず、そう申し上げておきます。

真実に遇えないというのが人間の問題点である。ですから、なぜ遇えないのか、いかにすれば遇えるのかということが具体的な課題になっていくわけです。その時にこの「真実」という言葉ですが、なかなか抽象的で捕らえ所がなく分かりにくい感じがします。

親鸞という方は、真実を的確に表わすために、「浄土真実」というように表現しました。私たちが普段使っている真実というのは、いわゆる「穢土^{えいど}真実」ですね。人間が作り出した真実です。その人間自身が実は真実の存在ではないのですから、一体その人間が作り出した真実とは何物なのでしょう。もちろん、真実とは名ばかりの偽物ということになります。

愛し合った者同士が、自分達の愛は真実であり永遠のものだと思うでしょう。しかし、しばらくたつと、どうしてもそうは言えない現実に直面するのではないですか。国と国が平和条約を結ぶ。これで両国間には永遠の平和が訪れると思うでしょう。エーリッヒ・フロムという人が『正気の世界』という書物の中で、ある歴史学者が紀元前1500年から紀元1860年までの間に、約8000に及ぶ平和条約が結ばれ、恒久平和が維持できると思われたけれども、平均して二年しか続かなかった、と述べていることを紹介しています。

これが穢土、即ち人間世界の「真実」です。親鸞は、穢土の真実ではなくて、本当の真実とは「浄土真実」だと言うのです。浄土は、阿弥陀の本願の世界です。阿弥陀の本願が私たちにはたらきかける。それを南無阿弥陀仏という。これこそ真実。

この真実に遇う、そして、真実の世界を生きる。そこに私達が、生きる本当の意味を^{まっとう}全うすることができる。人間にとってこの一番大事な真実に出遇って、

真実の世界を生きるということが、人間自身の力によっては、^{ある}或いは人間の思いや力のみによってはできないとう、大変な問題・課題を持って私達は生きている、こういうことなんですね。

三 楽を求める私

そこで、そのあたりのことを、仏教は具体的にどのように指摘してきたかということですが、いくつかあげてみたいと思います。

先ず、第一に、これは以前この会で申し上げたことなのですが、お釈迦様のご生涯についてです。お釈迦様が具体的にどのような人生を生きられたかということが、仏教では人間の本来の生き方のモデルとして取り上げられています。お釈迦様の御生涯が、^{ただ}唯、お釈迦様個人のことでなく、その御生涯が万人に通ずる意味を持っている。従って生涯を説くことが、万人に対する教えとなる。このような位置付けをしてきたわけです。勿論、お釈迦様は、先ほどの「浄土の真実」に出会われた方です。真実に出会うことのできない人間が、いかにして出会うことができたか、その典型的な例としてお釈迦様の生涯が説かれるのです。

そこで今申し上げたいのは、お釈迦様の御生涯を幾つかに分けてテーマごとに述べていくのですが、その最初に、とてもおもしろく興味深いことが出てまいります。生涯を述べる最初は「誕生」についてが普通ですが、経典で述べる場合、誕生以前に幾つかの「謎」のような表現で述べられる内容があります。

その一つが、お釈迦様は天にいたという不思議な表現ですね。もう一つが、生まれる前に天から降りて自分で母親の胎内^{たいたい}に入ったと、これも不思議な表現です。これらは一応、順番から言えば誕生前のことですね。母親の胎内に入って、それから出る、それが誕生ですから。

これは何を問題にしているのかと言うと、この事が人間の課題を表わしているのです。まず「天」というのは、楽の極みの世界です。有頂天などと言いますように。すなわち、楽を求めてゆく。楽を求めるというのが、結局人間の一生なんだと。一生をどんな生き方をするかを決めるのは、要するに楽をしたいと、これが最後の線なんだと。こういうことを表わすわけです。お釈迦様もまた、楽を求

める存在であった。しかし、そのことを課題として生き、ついにその生き方を超えることができた、ということを表わすのです。

それは言い換えれば、楽を求めたいという思いは、煩悩の思いですね。人間には沢山の煩悩がある。煩悩とは我が身を煩わせ我が心を悩ます私自身の心です。どれもこれも自己中心的な思いです。その煩悩を持って私達は生きているわけで、楽をしたいというのも、煩悩総動員で指し示している方向でしょう。

しかし、当然のごとく、楽を求めることさえできればいいんだという生き方を一生涯すれば、結局その人は、楽を求めたいという内なる煩悩に振り回され、煩悩のなすがままの人生を送るだけで終わるということになる。ですからお釈迦様が生涯かけて歩み抜かれたのは、楽を求めるという生き方を超えるということ。言い換えれば、煩悩の自己に気づき、煩悩の存在であることを慙愧し懺悔して生きる道、この道を遂に見い出したわけです。煩悩の深い私、迷いの深い私であることを自らの内に確認し、その私が真に生きる ことができる道を見い出していった。こういう人生を送られたわけですね。

逆に煩悩のなすがままになって、楽を求め、楽になりさえすればいいというのは、私は煩悩の存在であるということをはッキリ見ずに、確認せずに、まあ、多少は気付いていても、徹底的に自分はそういう存在だとは見ずに、それを隠し、それから逃げるようにしながら楽を求めていく生き方ですね。そうではなくハッキリと私は煩悩の存在なんだと、煩悩の自分であって、しかも同時に本当に生きていける道は何なのかと、こういう道を求め抜いたんだということですね。

四 怨みを超える

それからもう一つは、今回のテーマに直接関係してくるわけですが、自分で胎内に入ったということです。お母さんのお腹から出てくる、これが誕生ですが、私達は、誕生して、しばらく経って、どうしてこんな自分を生んだのかと言って、親を責めますね。親を責めるということは同時に自分も責めているわけで、社会全体をも責めているわけです。本当に、親も自分も社会も、自分が生きていくその全てのものを受け止めていくことができない人生を送るしかないんです。

それはもう本当に悲しい、せっかくこの世に生まれて、自分を受けとめていくことができない、自分を生んでくれた親を、又、自分が生きる場である社会を受けとめていくことができない。何か、怨みの思いというものを根本に持って、一生涯を生きるというのは本当に悲しいことです。ここに問題があり、これを超えないといけないんですね。

そのことが面白い表現で述べられているわけです。お釈迦様は、自分の意志でお母さんのお腹の中に入ったんだと。頼みもしないのにどうして生んだと言うんでなくて、自分のほうから入ったんですから、その逆で、頼んで生んでもらったのですね。

つまり、私は、私の意志で生まれてきたんだということです。生まれる時には、親の性格など一杯のものを受け継いで生まれます。親に似たくない、という思いを、子供は一度はするでしょうが、親に似ない子供はいないわけです。しかし、そのことが子供にとっては大変な苦痛になる。そこから怨みの思いが起るわけですね。

お釈迦様が、自分の意志で母親の胎内に入ったということは、その親を自分で選んだということ。親から出てくるのだから、すべての遺伝を受け継いで出てくる、そのことを「よし」として受け止めて、それは被害的なものではなく、自分で選び取ったものなのだ、と自分の責任としたわけです。ここに、怨みを超えた独立した生き方が誕生するのです。

このようなことが、お釈迦様の御生涯を表わす時に、誕生という人生の始まりから述べていくその前に、述べられていることなのです。これが人間の課題なんです。この人間の課題を解決することが、お釈迦様の生きることの意味であった。そのためにお釈迦様という人は、このような人生を歩まれたんだと、こういうような説き方をされているように思います。

五 苦しみが本質的に解決しない

次に、次のような表現の仕方もあります。先ほど、真実に遇うとか遇わないということを申しましたが、この「真実」を、仏教は、「阿弥陀仏」で表わしたんですね。阿弥陀仏というもので、私達が本当に出遇っていくべき真実というものを表わした。真実だけであれば取りつく島が無いようなものですね。それを阿弥

陀仏で非常に分かりやすく現わした。分かりやすくと言ってもそのところをお話しないと一寸ね、逆に分かりにくいかもしれませんけれども。經典には、阿弥陀仏とはどういうものかということを中心に詳しく表わして、それで、なるほど真実とはこういうことであったのかということが、かすかではあるけれども、私達に納得できるようになっていると思います。これが先ほどの「浄土の真実」ということです。

その阿弥陀仏の私たちへのはたらき、それを本願と言いますが、真実は真実でないものに対して必ずはたらきかけて、そのものを真実の存在にしていって、それが真実なんだ、その真実を阿弥陀仏で表わすわけです。その阿弥陀のはたらき、願いを、具体的に表わしてゆくのですが、その中で、先ず初めに、阿弥陀の願いというものは、地獄、餓鬼、畜生を無くしたいという、このような表現で言われます。地獄、餓鬼、畜生をこの世から無くしたい。これは阿弥陀の本願の内容を、大きな視点で言われていることかと思えます。

私達の今生きている姿が、地獄、餓鬼、畜生とこう表現されるようなあり方、生き方をしていると言うんですね。心のあり方と言ってもいいんですけども、心だけに狭く限る必要はなくて、人間全体のあり方ですね。そういうわけで、地獄であり、餓鬼であり、畜生であるということが人間の問題点、その問題点を克服させたいというのが真実なる阿弥陀の願いなのです。

地獄、餓鬼、畜生とは、どのような意味か。いろいろ言われますが、今は、このように見てみましょう。地獄というのは、本質的な解決ができないあり方。地獄の特徴と言うのはですね、様々な苦しみに何度も何度もおそわれてしまう。苦しいことがあれば、私たちは当然、なぜ、そういう苦しみに出会ったのかと考えますね。そして、もうその苦しみは二度と味わうことがないように、注意をしながらやっていこうとしますね。ところがそう思っているんだけど、そこまでは考えたんだけど、実際は、又同じような苦しみに出会うんです。あれ程考えたのに同じ苦しみに出会うとは、なんとも情けないというかね、本当に苦しいんですね。それも何度も何度も出会うんです。こうなると、自分を立ち上げる力をなくすような感じにもなりますね。

そういう苦しみに出会って放っていたんではない、自分なりに一生懸命考えて、これでもうこの苦しみを超えることができるし、もうこういう苦しみを経験しな

いぞと、こう思ったんだけどでも又経験してしまう。自分で考えた考えが、それを普通は反省と言うんですね。反省をし、自分なりにいろいろ考えたことが本質的なもの、根源的なものにならないんです。表面的なものと言いますか、もうそこがなんともやり切れないんですよ。決して自分が不真面目だとかね、そういうものではなくて、一生懸命自分の現実に向き合っているんだけど、本質的と言うか、一番根本からのね、問題解決の道になっていかないんですね。それが人間なんだということなのです。

私達の考えは、もし、何かがあれば、しっかり考えて、それこそ傾向と対策で、大体こういうようなものだから、こういうふうにやっていけば今度は大丈夫と思ってやっていくんだけど、又同じ目に会う。十分考えていけば、もうそれで大丈夫だと思うんだけど、又同じ目に会う。もうそれが私達の限界と言うか、いや、「限界」と言うより、そこに「問題」があるんですね。限界と言うと、その限界まではまだいいという感じで、そこが限界だから、それ以上は仕方が無いんだという、何か許せる感じがしますけれども、本当は「限界」じゃなくて「問題」があるんです。初めから問題がある。人間がいくら考えても表面的なところはまだしも、一番根本のところは解決がつかないんです。そのつかないということを見せずに、いや、つくんだと言ってやっている。その時はつきそうな感じがするんですけど、又同じ苦しみに出会う。こういうのが人間なんだということでしょう。それを地獄と言うんです。人間は地獄の存在ですね。

六 自己の分齊が分からず主体性がない

次は、餓鬼です。自己の分齊を知らない者、としておきます。自己の分齊を知り、知った上で生きる、このことができないんです。分齊と言うのは、分限際量と言われますね。自分という人間は、何ができて、何ができない存在なのか。全てができるわけではないんですよ。できることもあれば、できないこともある。それが自分なのです。決してスーパーマンではない。その自分に即した生き方をしていくことができないのですね。

できないこととは何かということ、自分を救うということ。人は自分でありながら、自分を救うことができない。これが人間の特徴ではないでしょうか。そこに、絶対「他」なるものが必要不可欠となります。「他」であるからといって、

他人の力ということではありません。真実ということなのです。人は真実に出会い、真実の力によってでなければ救われない。なぜか。人は真実ではないからです。真実でないものを救うものは真実だけです。それを「他」というのです。

その絶対「他」なる真実によってはじめてできることを、私たちは自分でしようとする。自分で自分を救おうとする。自分の考えだけで生きればうまくいく、というのがそれです。うまくはいかない。救われて生きることはできないのです。そこに人間の傲慢性と言いますか、あるいは、自分を正当化し、自分の能力を肯定するような、自己中心的な傾向を私達が持っているわけですから、自分の本当の分限は、どこまでなのかが分からないのです。

おもしろい表現があります。餓鬼は、食べ物を欲しがってどんどん自分の口に入れようとする。箸で食べる時に腕が曲がらない。だから、摘むんですけども、それを自分の口へ持っていけない。向かい側に人がいるんですけど、とにかく自分の口に入れようとする。ですから手前のところで落ちて口には入らない。そういう話を聞いたことがあります。これが餓鬼の姿ですね。腕が曲がらないのが自分であるという自己の分齊を知らないのです。

分齊を知ればどうなるかと言えば、摘んだ箸を向い側にいる人へ伸ばし、相手の口に入れてあげ、食べさせてあげるのです。これは智慧がありますね。曲がった腕を無理に自分のほうへ曲げる必要がないんです。餓鬼は自己中心ですから、曲がらないのが自分の分齊なのにそれを無視して、いや、俺が喰うんだと言って強引にやる。それで食べられない。まことに愚かで智慧のない姿ですね。

もう一つは畜生です。畜生と言いののは、独立し主体的に生きることができない姿です。畜という字は、畜養される、家畜として養われるということです。そのような生き方をする。何かによって、自分がいわば家畜のようにコントロールされて生きてゆく、そのような生き方。そのものに全面的に依存をしています。

自分の主体性というのは、確保し、育て、大事にして行かねばならない。ここに自己の尊厳がある。けっしてこれを売ってはいけない。主体性を持ち、独立して生きていくところに、人間の尊厳がある。簡単に言えば、人は人の言うなりになってはいけないのです。自分の考えをしっかりと持って、どこででもそれが言えなければならぬ。強い者の前だから言えない、弱い者の前なら言える、というのはいけない。

しかし、それができないのを畜生というのです。自分が一人の人間、一つの生きものとして独立して主体的に生きる、そのことができないのです。何等かのものに依存し、自分にとって、ある意味で一番大事な主体性を売ると言いますかね、大変な表現ですけども、そのような形で生きている。

地獄、餓鬼、畜生、これが人間の姿、このような課題を根本に持っているのが人間であると仏教は言うのです。ですから、もし、この阿弥陀の願い、真実なるものの願いによって、私の地獄性、餓鬼性、畜生性、これらが克服できれば、苦しみに出会っても本質的な解決を得ることができるのです。出会うその苦しみによって、却って自分とは何かを教えられていく。その苦しみに出会うことが、却って自分が歩いていく道になるんです。そういう本質的な解決ができるというわけですね。

そして、自己の分齊を知って、即ち私は無明・煩惱の存在なんだと、ここはもう動かない、こういう者としてなおかつと言うか、こういう者であるが故に真に生きる道が開かれるんですね。さらに、精神的に独立し、主体的に本当の自分の内なる願い、願心によって生きていこうというようになっていく。

七 願いに背く私

もう一つ見ておきますと、五逆と誹謗正法ですね。正法を誹謗する。五逆は、五つのものに逆らうという意味です。五逆は、私達が生まれ人生を生き、真に満足するという人間の課題を克服し、遂に遇うべき真実に出遇っていく、そのような生き方をしていくためになくてはならない存在を五つで言っているわけです。その五つは父と母、これがグループですね。そして、師と友と仏、これがグループですね。

父と母を^{おんてん}恩田と言います。師と友と仏を^{ふくてん}福田と言います。師と友と仏は真に人生を歩いてゆくために、私の問題点、課題を本当に超えてゆくためになくてはならないものです。その課題を超えさせてくれるのが仏教の教えですから、仏教上の師であり、共に歩いてくれる友。そして仏様、これは一応、お釈迦様を考えればいいと思いますね。

恩田も福田も田です。^{たと}喩えているわけですね。恩田という田がある。この田の中に私が生まれたわけです。そして、先ほど無から有を生じせしめられたと言いましたが、何年か前に私たちは誕生したわけです。私を誕生せしめてくれたのが父であり母です。誕生せしめてくださって、段々と大きくしてくださって、そして、親としては、この子が人間として本当の幸せ、即ち、人間の課題の克服ができるところへ行っしてほしいわけです。

そこが福田です。福田という田の中に植え代えられる。それまでは^{なわしろ}苗代のようなものでしょうね。ここへ植え代えられて、ここでお釈迦様の説かれた教えを、師から聞いて、友と共に歩いていく。この素晴らしき福田の世界、この世界を生涯ずっと生きていくことによって、遂に人間の課題を克服していくと。この恩田、福田は本当に大事なものです。この二つを取り去ったら何にもないと言うか、取り去ることができない。それほどに、ご恩があり感謝すべきであり、私という人間にとって根源的に大切なものです。

ところがですね、私達の課題・問題点は、その恩田に^{そむ}「背く」、そして福田に^い「違す」と言われているのです。^{たが}違うということですね。恩田と福田は私達の一生涯の全ての土台になるもの、大地になるような世界ですから、これに背き違うとすれば、大変大きな意味を持ちます。

このことについては考えるべきところがいろいろあるように思います。まず、父と母を田で表わすのは一応分かるとして、何の田かと言う時に恩の田だと言うわけです。さらに、教えを聞いていって遂に大きな世界に出る、問題を克服していける、そうせしめてくださる田を福田と言うんですね。そこで、親を恩田と言うのはどういう意味があるのかということですね。そこが、私はどうして生まれてきたのかと言うこの問いに、直接的にすばりと答えるところとなっているようにも思います。ですから、もし、私が生きる意味が分かって、本当によかったと思えるようになれば、私を生んでくださった親に対して、いかに御恩があるかがよく分かると思いますね。

親という存在、親子という存在は、どう言えればいいか、表現が難しいですが、本当に面白い存在ですね。私自身は既に父も母も亡くなっていますが、父が亡くなって二十年、母が亡くなって七年ですが、次第に親に対する思いが変わってき

たと言うか、何か少しずつ、ああ、これが親だったのかなというような感じを持つことが時々あります。親が活着ている時は、考える余裕などありませんね。いろいろ言いたいことや思いがあって、きちんと整理などできません。

最近どのように思うようになったかと言えば、やはり、親の願いとということ。そして、その親の願いに、子供である自分が応えていかなければいけないということ。親は、子供に対して、実に明確な願いを持っていたんだということが、少しずつ感じられるような気がします。どんな願いか、それは直接、親に聞いていたということだけでなく、子供としての自分が感じることなんです、だから、違っているかもしれませんが、親の願いは、「真実に出遇っていけ」ということに違いないと思います。それを子供に直接分かるように実際どれだけ言ったかとなれば、これはいろいろあると思います。しかし、子供としては、まったくこの世に存在していなかった私を、敢えてこの世に誕生させ、この世に送り出した親の思いというものは、どうかこの世に現われて真実に出遇ってほしいということではなかったかと思ひます。

親本人に言わせると、いや、そうじゃないと言うかもしれません。仮にそうであっても、いや、そうじゃない、これに決まっているんだと、こちらの方が言いたい感じがします。ですから、子供の私は、親のその願ひ、真実に出遇っていけという願ひに答えていくような生涯をしなければいけない。何かそれで親との一本の線がきちっとできたような感じがします。これが親の願ひだったんだと。

そういうことで、子供の私は、親によってこの世に誕生せしめられた。一方、この世に送り出した親の方は、どうか真実に出遇ってほしい、と。その願ひを受けとめて、もし、真実に出遇うことができれば、それは本当にうれしいこと。また、そのようになるために歩いていくということが大事なことなんでしょう。

しかし、私達は、そのような意味合ひで恩を思っているであろうか。親は、私の一番の土台を作ってくれた。それは誕生ということ。この世に送り出してくれた。実に大きな意味のあることだと思ひます。しかし、その親の願ひに私達は背く、こういう問題があるわけです。

もう一つは福田ですね。親は基本的に一番根本のところから、子供に対し真実に出会ってほしいと願う、その真実を私に具体的に教えてくれる、あるいは真実への道を共に歩いてくれる、そういう存在がなければならぬ。その人たちが本

当の幸せを私にもたらしてくれるわけです。その人たちは、真実の願い、即ち、真実があなたに対して願い、はたらきかけをしているんですよ、と。それを簡単に言えば、仏教の教えがあるんですよ、聞いてみませんか、私に声をかけてくださる。このようにして、この方達が私に近付いてきてくれる。

しかし、私は、違うことを言うわけです。いや、仏教などいりません、私には私の考えがあるんですよ。これは「福田に違^いす」と言って、違^{たが}うわけです。違^{たが}うというのは、自分には自分の考えがあるんだというわけですよね。これをどこまでも押し通そうとする。ですから、その人達の声が入ってこないんですよ。

こういうような本当に大事な五人の人へ逆らうということ、それは即ち、根本はどうかと言うと、そこに誹^ひ謗^{ぼう}正法とすることがある。正法を謗^{そし}ると言うことですね。真実なるものが私を救おうとはたらきかける、それが正法です。従って、正法というはたらきかけを受けなければ私たちは救われぬ。その正法を受け入れるどころか謗^{そし}っていく。分かりやすく言えば、親が子供に対して愛情を注ぎ願いをかけていく。そのように真実なるものが私に対して愛情を注ぎ願いをかけてくる、それを南無阿弥陀仏と言います。そのはたらきを法と言う。それを誹^ひ謗^{ぼう}する、問題にしない、そんなものはいらぬ、関係ないとしてしまう。そんなものがあるはずないと言ってしまふ。そのように私を生かすための決定的な要因である五つのものに反逆し、私を真に生かすところの真実のはたらきを誹^ひ謗^{ぼう}しているのが人間だというわけです。

このようにして、私達の課題についてはいろいろと言われます。もとは一つなんでしょうが。そして、この課題を超えてゆく道、解決していく道を明らかにしたのが仏教です。次に、その教えについて、その一端を頂いてみたいと思います。

八 私の現実の持つ意味

これらの私達の問題の解決ですが、仏教の教えはどのようにそのこのところを説いているのか。人間の課題とは、即ち、最初に結論的に申したのは、真実に遇えないということ、その真実に出遇っていく道を説くのが仏教の教えなのです。そ

れは私達の一生涯の歩みのところで言えるわけです。即ち、私の生涯の全体で真実に出遇っていくのだということですね。

先ず、最初に大事なことはですね、真実に出遇うべく真実への願いをおこすということです。具体的な表現は、真実に出遇いたいとか、真実に生きたいとか、真実の世界を生きたいとか、いろいろ表現はあるでしょうが、そのような真実への願いをおこすということが先ず出発点として大事です。ところがですね、この願いは皆持っていないのかと言えば、実は初めから皆持っていると言ってもいいのです。それが、自分自身にどのくらい自覚されるかということとは、いろいろあるわけなんでしょうが。

先程、地獄について言いましたけども、いろんな問題に出遇い苦しむ、一生懸命にやるんだけども、問題の解決ができない、又、苦しむという、そのようになるのは、実は、何とかして真実に出遇いたいという内なる願いがあって、それによって、そのような歩みがなされていくのではないかと思うんです。真実というものが分からないもんですから、そのような生き方にならざるをえないのですね。人は皆、心の底に、そういう願いを持っているわけです。それが大事なことです。そして、具体的にこれを大前提として、仏教は説かれていくわけです。

私達が歩いてゆく上で大事なポイントが三つある。一つは、私の現実です。私達はこの現実を生きてゆくしかないし、現実を生きるのが正に私達なんですけど、この現実がどんな意味を持っているかがよく分からない。毎日出遇う現実の意味がよく分からないままでやっていくと、それに振り回されたり、あるいは、こっちの方が何か強い調子で出て傲慢になったりして、本来のその現実と共に生きるということの意味が分からないままで過ごしてしまうんですね。現実の意味は何かということが問題になりますね。これを明らかにするのが二番目のポイントになります。

ところが、この意味がなかなか明らかにならないのです。ならないんですけども、一応この現実には、こういう意味があったんじゃないかと私の思いで、推測し判断したりすることはあります。たとえば、最近、自分よりも年下の者から、先輩もう一寸頑張ってくださいよ、頼りにしていますよ、というような調子で言われた。これは最近、自分があまり頑張っていないから、こういう人までが言って叱ってくれたんだと、本当に感謝すべきだと、そういう意味合いでその現実を受

け止めるということはありますね。そのようにして、自分なりに意味を探っていきながら、あのことにはこういう意味があるのではないかと考えてゆくわけです。考えてもその意味が分からないのはやり切れないですね。

ところが私達が考えてゆく意味には、これもやはり先程の限界と言うか、問題点があるんですね。どういう問題点かと言うと、確かに現実はそのような意味がありそうなんだけれども、そこで受け止められた意味、そういう意味を汲んで現実に対処していただくだけでは、必ずしも私そのものが変わっていかないということがあるんです。変わっていくというのが、出会うべき真実に出遇っていく歩みができるといって、そのようになっていかないんです。現実の意味は一応何か分かるような感じがする。そして、それなりに充実した毎日が送れるかもしれませんが、真実に出遇っていくことには必ずしもならない。ある意味で充実しておりつつ、空しいんです。そういう問題があるんですね。

ある程度は人間の考えでいく。しかし、もう一つ奥がいかないんです。もう一つ奥があるんですね。それは現実を何等かの意味があると受け止めて歩いていくことによって、そのことによってそれなりの充実は感じるでしょうけれども、私とは何か、この自己とは何かに目覚めていくような受け止め方ができないんです。ここにまで立ち入ってその道を説いているのが仏教だと思います。

九 現実私の仏道の道場

この私が出遇っていく現実、どういう意味があるかと言うと、その現実の一つ一つが私の仏道の場である。そこが私が仏道をという道を歩いてゆく場所、道場だということです。その現実の一つ一つがですね。人から何かを言われたという現実、何か辛いことが起ったという現実、悲しいことがあったという現実、それら現実が皆、そこで、私がそこを仏道の場として、いわゆる道場として歩いていく場なんだと。ですから、仏道の場というのは、簡単に言えば、仏というのが目覚めという意味ですから、私が自己とは何かに目覚めていく、それは同時に、一番の目標である真実とは何かに目覚めていくその道でね。それが具体的にどこにあるかと言うと、それが他ならない私の現実のそこにある。

都合の悪いような現実からは逃げたいのですが、逃げるということは自分の仏道の場から逃げるということになる。都合の悪いところから逃げて、どこか都合

のいいところを捜すけれども、そういうところはないんですね。現実を私の仏道の道場と受け止めて取り組んでいく。その時の私自身がどのような姿勢で取り組んでいくべきか。そこがポイントなのです。私の心の一番の根っここのところに真心をおこして、その真心でもって、仏道の道場である我が現実に対処していく、この仕組みなんですね。この構造が、初めて私達の上 に自己とは何かを知らせる目覚めがおこる仕組みとなったのです。

自分で自分を反省して、自分が目覚めることができそうに思うんですが、これもよくお分かりのように、反省する自分と反省させられる自分という二つの自分をいつのまにか立てているんですね。反省させられる方は、何か失敗をやらかした悪い自分で、反省する自分は失敗なんかまったくない完璧な自分、それが間違った自分を反省し直すという仕組みにいつのまにかなっているんですね。この仕組みができるということは、このように反省できる完璧な自分がいるという前提に立っています。そういう自分はいないんですね。反省させられる側の自分しかいないんです。反省して自分が新たに生まれ変わりよくなってということに思う、そういう錯角に私達は陥りやすい。

それならどうすれば本当の自分に目覚めていくことができるか、ある意味で本当に自分を反省することができるか。まさにそこを仏教は説いたわけです。その仕組みはですね、私の現実、それを私の仏道の道場であると受け止めて、そのような意味を持っている現実なんだと認識して、その現実に対して、私は真心を私という存在の一番深いところでおこす、この姿勢でこの現実に対処していく。このやり方を途中でやめず、継続一貫続けていくことによって、初めて、自己とは何か、それは同時に真実とは何かということに目覚めていくんだと。こういうことを仏教の経典は説いているのです。

十 真心をおこして取り組む

さて、現実から逃げず、現実を我が仏道の道場であると受けとめて、私の心の底に真心をおこして現実に取り組んでいく。この歩みを継続していく。いろんな現実が私を囲む。それでもこの方針を貫いていく。段々とやっていくうちにこの歩みが順調に続けられないようになっていく。どういうことかと言うと、真心と言いますけれども、言葉は真心という表現ですが、しかし、いくら真心をおこそ

うと思っても、私の中に真心がおこらないんです。そもそも初めから無いものですから。真心をおこしていると思っているだけです。もっとも、初めのうちは思っているだけとは気づきません。実際におこしていると思っています。自分もおこしているし、人にもそれを要求していく。

ところがその真心なるもので、自分の仕事をガンガンやるんだけど、仕事そのものが真心でやったにしては、あまりにもお粗末な姿になっていることに気づくのです。そうするとこの仕事が真心に対して、「もっとお前、真心をおこせ。こんなお粗末な俺を作ってくれるな。お前がいい加減な心をおこしてやるから、いい加減な俺ができてしまうんだ」と、私自身の真心に対して要求するわけです。それで、「すまん、そんなつまりじゃないんだ。真心をおこしているつもりなんだが」と言って、いよいよ真心なるものをおこしてやるんだけど、名前ばかりでね、本物はないもんですから、いよいよこの仕事という我が現実がお粗末なものになってくる。

この歩みを、途中で諦めたり、放棄したりせずにやり抜いていくことによって、自分の現実が、真心があるにしてはおこりえないようなお粗末な現実になっていく。このように自分の現実を見る力が段々できてくるんですね。初めは私達は自分に甘いですから、真心もあれば、仕事も立派にできていると思います。しかし、この歩みをどんどんやってゆくことによって、いかに自分の現実がお粗末なものかと知らされる。それは同時に、この現実をつくり出している一番基の原動力である真心が、実は自分にはなかったんだということに初めて気づいていくんです。これが私の中に真心がないということ、即ち、自己とは何かを気づかせる方法なんです。この方法を仏教は説くのです。

普通私達は、お前には真心はないと、このところだけを言われたんでは腹が立つぐらいで、何とも変化はおこりません。しかし、一番大事なのは、自分の現実なんです。口では強がり言っても現実はお粗末ですね。だから、そのお粗末な現実が逆に私の正体を照らし出す。そういう仕組みで、自己とは何かということが本当に明らかになっていく、知らされていくわけです。私の前に、私が逃げられない形で、真実という真に私を照らし出す鏡を置く、それが「真心をおこせ」の教えでしょう。真実を自分以外のところに設定すると、私とは関係のないものになりがちです。ですから、真実を自分の内に設定する。そうすると、そ

の真心が自分自身ですから、それから逃げることはできない。いやそれ以上に、実は真心が自分にはあると思っているのが私たちですから、これは^{はなは}甚だ好都合、ドンピシャリの、実に巧みな教えという感じです。

ですから、この現実を大事に受けとめて、押さえておかないといけない。途中で一寸おかしくなったから、格好悪いから何かに変えろとか、^{こまか}誤魔化すとかになってはいけません。この現実、私の仏道の道場であるんだということを明確に押さえておくんですね。仏道、即ち、真実への道を歩むのが私なんだと。この方法で一生懸命歩いていく。この歩みの仕組み、構造は、正しく人間とは何かを明らかにした仏の智慧から生まれたものです。この教えによって、初めて自己というものが明らかに知らされてくる。

十一 真心無き自己に気づく

そうしますとね、私というのは、初めは私の中に真心があると思っていたんですね。けれども、この歩みを長い時間をかけて、何度も何度もやっていく。時間は何年も何十年もかかるかもしれないです。何年かかっても、それは問題ではありません。それが私にたらす私自身の歩みなのですから。そのような歩みによって自分の本当の姿が知らされてくる。初めにあると思っていた真実なる心は、この歩みによって、私の中にはないのだと分かる。私は真実なき不実の存在、むしろ真実ならざる心を持っているのが私なんだということが明らかになってくるのです。

ということは、初め、私の中に真実の心があると思っていたということは、これは同時に、本当の真実を否定して、私の方に真実があるんだとしていた、ということなんですよ。そのことには、初めの段階では気づいていない。それが、このようにして、本当の自分の心を知らされていくにつれて、真実を否定している自分であることに気づき、その真実こそ本当の真実だったんだ、自分の方こそ真実でなかったんだと、遂に自己を否定し、真実を肯定することができるのです。仏教はその真実を、私たちに大変分かりやすい形で阿弥陀仏というように表わします。阿弥陀のはたらき・南無阿弥陀仏と表わすのです。阿弥陀の上に真実があ

り、私のところには不実しかない。かつてと全く逆になるわけです。そういう歩み、それが仏教の歩みなのです。

私達が仏教の教えを聞いて、実際に何をやっていくのかと言うと、勿論、聞くのは大変大事なことですけれども、ただ、聞くだけではないですね。聞いて、私達がやっていかねばならないことが、今申したことなのです。繰り返しますが、私たちには自分の現実があります。逃げたいような現実もありますけれども、それらの現実が全て私が本当に真実に出遇っていくための、いわば仏道の道場なんだと、そういう受けとめをして、私の一番深いところに真実なる心、まごころをおこしてこの現実に取り組んでいく、このあり方ですね。これを続けていく。こういう歩みをやっていくんですよ。聞法の歩みというのはね。

十二 仏教は真実の因の世界を説く

もう一つ大事なことがあります。それはですね、こういう言い方をさせてくださいね。「真実の因と果」。何か難しいような感じですが。これはですね、真実というものを仏教はただ、真実という一面的なもので表わさないんです。真実を因と果というように立体的に表わすのです。果は私たちを救うところの真実、即ち仏教はそれを阿弥陀の本願として表わしました。因は、なぜ阿弥陀の本願が起こされたのかということです。果の次元だけでなく、因の次元を表わすことによって、真実というものが非常に明瞭になっていると思います。これは仏教が生み出した物凄い智慧だというのが私の今の実感です。ざっくりばらんに言えば、このように立体的に表わしてくれたために、私達は真実に出遇うことができるんだと、今私はこのように思っています。「真実に出会う方法」と言えば大袈裟なことになりますが。

これは本当に優れた方法だと思いますね。まず逆に、立体的でない場合を少し考えてみましょう。ここに私達が一生をあげて出遇っていききたい真実があるとします。それを仏教は阿弥陀仏と言ったわけですね。ですから阿弥陀仏に出遇う、と言います。その時に私達はどうか考えるかと言うと、私が阿弥陀という真実なるものに出遇うと、そういう何か平面的な世界になってしまうんですよ。これは大変問題なところですよ。そういう説明ではまだ分かりにくいかもしれませんが、この問題はどこにあるかと言うと、真実なるもの出遇っても、それによって、逆に

私が奴隷的な状態になる、真実に隷属すると言うか、真実のなすがままにされてしまうという、このようになる危険性があるんですね。あるいは、真実である阿弥陀に甘える、向こうは私を救うと言うから、私は言われるままに救われれば、もうそれでいいんだ、となってしまう。

そうすると、救われて有り難いという思いはあっても、私自身は何にも変わっていないんですね。私自身が何にも変わらないまま阿弥陀によって救われるということはあるはずがない。そういう危険性を持ってるんですね。真実である仏に対して隷属化し、陶醉するわけです。そこには、真の救いの特徴である独立と目覚めということはありません。ですから、仏教は、阿弥陀仏という私を救う力、即ち、それが果、それだけを説くのではなく、その私を救う力は、何かによって、何等かの事情によって生み出されたものなんだという因の世界を明らかにして説くのです。

因を説かない宗教はたくさんあるでしょう。仏教はこの因を説くのです。私を救う力を持った阿弥陀がなぜあるのか、なぜ阿弥陀の本願で救われるのか、なぜ南無阿弥陀仏なのか。真実はなぜ真実なのか。このことを明らかにするのです。仏教には信じることを上から強要するような威圧的な要素はありません。私たちを具体的に教えによって歩ませ、その歩みの道理として起こる目覚めを促しているのです。因を説くことは、まさにその目覚めをなさしめる核心の教えと言ってもいいのではないかと私は思っています。

十三 なぜ南無阿弥陀仏なのか

真実ということ、仏教は阿弥陀仏で表わしました。阿弥陀のはたらきを南無阿弥陀仏と言いますね。南無阿弥陀仏と口で称えるのが念仏申すということです。では、なぜ南無阿弥陀仏が私を救うのか。私たちにとって、なぜ南無阿弥陀仏と念仏することが私の救いになるのか、それは大変な問題ですね。これほどの難問は無いという感じもします。しかし、これが分からないといけない。これが分かるところに、阿弥陀への頷きが起こるのです。

これは、阿弥陀を果の世界のところだけで見ても分からないんです。因の世界を見れば分る。因の世界と言うのは、なぜ、どのようにして阿弥陀は阿弥陀となったのか、その問いに答えるのが因の世界です。南無阿弥陀仏という阿弥陀のは

たらきが私を救うと言っても、どこでそんなことが言えるのか、皆目分からない。それを無理強いをして、いや、救うんだ、救うんだと言っても仕方ありません。そうでなくて理由があるんです。その理由を表わすのが因の世界なのです。

どういうことかと言いますと、阿弥陀という仏は、その真実の智慧によって私という人間を明らかに見ることができてた。人間存在を明らかに間違いなく見ることができた。見てみると、真実がないというのが人間存在だと。真に生きることを願っている人間に、その真実がない。真実がなければ、真に生きることはできません。せっかくこの世に生まれて、真実というものを内に持ってない存在がいることは、真実の阿弥陀から見れば、もう大変なことですよ。胸を引き裂かれるようなことでしょう。そこに大悲の心がおこるわけです。大いなる願いですね。この悲願は、真実のない者をどんなことがあっても真実に生かそうと願う。では、どのようにしたらかければ、真実のない者が真に生きることが出来るか。そのことを考えに考え抜いて遂にできたのが阿弥陀の本願、南無阿弥陀仏なのです。この南無阿弥陀仏という本願の力によって、間違いなく、真実のない者を、しかも真に生きることが出来るようにすることが出来る。そういうような、阿弥陀の本願、南無阿弥陀仏が生まれるまでの内容があるんです。この世界を知ることができれば、南無阿弥陀 仏は、正しく私のためのものだということ、私のためにはたらきかけられているものだということが頷ける。阿弥陀について、果だけでなく、因を知っていくことが、端的に言えば真実に出遇っていく道という感じがしますね。もっとも、真実に出遇う道というようなことは、あまり簡単に言わない方がいいんでしょうけれど。

親鸞聖人という方が挙げられた人間のもっとも深い問題点は、人間は阿弥陀の因の世界を知ろうとしないのだ、ということです。私たちはこれを知りたくないんです。そこに人間存在の迷妄があります。この因が分からなければ真実に出遇うことができない。因が分かれば真実に出遇うことができるんだけど、それをしようとしなのが人間存在であり、それを「悲しき哉」と仰るのが親鸞聖人なのです。親鸞聖人は、因を知ろうとしない心を我が内に見ておられるのです。仏と人間とはそういう関係になるんですね。一番明らかにすべきもの、それを私達は一番明らかにしたくない。なぜか。どこまでも自己中心で いたいんです。愚かなことなただけでも、そういう存在なんですね。

十四 転回する軸

経典は、因のところを、とても分かりやすい喩えを使って、何十ページもの分量で説くのです。因の世界があることを知ってほしいわけですよ。大無量寿経という経典は、その因の世界を説きます。因の世界が分かれば、同時に、因の世界を知りたくない自分が分かる。それが分かれば、ここで人は転回します。その転回する転回軸が何であるかを考えれば、それが懺悔ではないかと思えます。

懺悔というのは、この因と果の両方の内容を持った阿弥陀仏にお詫びをすることです。私という存在が何であるかを明らかにして、明らかにしてみると真実がないという大変な存在である。それ故に、真実なる阿弥陀は、真実でない私に大いなる悲しみの心を起こし、大いなる願いをもって、どうすれば真実のない者をしかも真実に生きる者たらしめることができるか、不可能を可能にするようなものですね。そこで遂に阿弥陀の本願・南無阿弥陀仏を興して、私にはたらきかけてくださった。私はそういうこととはつゆ知らずに、私の「我」の思いをただ主張するだけで、これまでやってきた、その私をこの真実である阿弥陀仏に対して、お詫びをすることです。あなたの真心を私は踏みにじって参りました、と。この懺悔で人は初めて変わる、転回をすることです。

そう言うことで、このように自己を知らされていく歩みは、私たちが生涯をかけて歩んでゆく歩みですね。だから、この歩みは、どこかで終わるということではありません。大きな世界に背いている私を懺悔していく、お詫びをしていくということは、どこまでも続いてゆく、そのように歩いていくことが私自身が真実に出遇ってゆく姿なんです。懺悔を卒業して、真実に出遇うということはない。人間が真実に背いて自己を主張していく存在である以上。

そのように、生涯をかけて遂に真実に出遇っていくのが私達の人生。だから、親が私をこの世に生み出してくれたということは、それは本当に、どうか真実に出遇ってほしい、という願いがそこにある。私達はそれに応えて生涯をかけて歩いて、一步一步真実に出遇ってゆく。どうして私は生まれてきたか。それは、真実に出遇うことができるからです。そこに人間の生きる意味があるのです。（続く）